おわりに

RSL センター 副センター長
中沢 聖史

立教サービスラーニングセンターの実践系科目は、受入機関となる NPO や企業、教育機関の指導の下、学生が一定期間、フィールドで体験学習を行う。ただ単に現場に足を運ぶだけではなく、テーマとなる社会課題について事前に教室で学習をすること、活動後に自らの体験を言語化し、学びを深めることを一連のプロセスとし、理論学習からふりかえり学習までを修了することで単位が認められる点が特色である。

今年度は、コロナ禍を経て、RSL-グローバル(フィリピン)の開講が再開した。この科目は、約 2 週間、フィリピンのアジア・トリニティ大学(Trinity University of Asia: TUA)の寮でインド、韓国、フィリピン、日本の学生が共同生活をしながら、近隣のコミュニティで Service Learning をおこなうものであり、新型コロナウイルス感染症の影響による中止や規模の縮小などを経て、5 年ぶりの開講となった。フィリピン特有の強い日差しと蒸し暑さの中で、学生たちは国籍混合の小グループに分かれ、アジア・トリニティ大学近隣のコミュニティで収入向上や幼児教育などのプロジェクトの支援活動などをおこなった。

活動を終えて成田空港に到着し、スーツケースの回収レーンに向かっていた時、学生のひとりから声をかけられる。

「先生、ぼくたちが活動していたあのコミュニティ、どう思います？」

質問の意図を理解するために、どういう意味かと聞き返すと、学生は少し考えたあと、次のように口にした。

「なんか衝撃的すぎて…」

学生たちには、渡航前におこなう事前学習の段階で、活動に先駆け、フィリピンの健康寿命や識字教育の普及率、平均収入や失業率などをリサーチさせたが、それは数値化されたデータを日本のそれと比較しただけであり、実際、現地での活動を通して目の当たりにする光景に、学生は衝撃を受けていたようだった。そして、これからおこなう事後学習ではその「衝撃」の正体を言語化し、活動中の自分の感情と向き合いながら、フィールドでの発見をふりかえる。

この科目では、地域や社会で活動することを通して、社会課題の「リアル」を感じ、社会における自分の在り方を見つめる、というプロセスを重視し、到達目標として学生たちにも示している。帰国の時点ではまだ曖昧なこの「衝撃」が、ふりかえり学習を通してより輪郭がはっきりとした感情と結びつき、これから先の人生で、社会課題解決に取り組むマインドセットやアクションの原点となることを期待したい。

新型コロナウイルス感染症予防の行動制限解除を経て、今年度はすべての科目が概ねコロナ禍以前と同様の活動期間・活動内容で開講することができた。科目を担当する教員や、活動の受け入れ先となる団体の皆様、そして RSL センター職員や関係者の皆様には、改めて心から感謝を申し上げます。